

新会員に対する早期のロータリー哲学教育の重要性

本ARCを2年半経験しての感想を述べる。

グローバルなロータリー活動では、会員増強、財団への寄付、6つの分野への国際社会奉仕などに重点が置かれており、国際ロータリーは世界有数の国際人道支援団体であると公言している。しかし、これらを実行するのは草の根のロータリアンである。

私の属している2700地区や会員増強セミナーで基調講演をした2720地区で、①ロータリーは奉仕団体である ②ロータリーは異業種交流の親睦団体である ③ロータリーは親睦と奉仕の二本立の団体であるとの三択問題を質問すると、①に手を挙げる人は皆無、②はバラバラ、③が圧倒的に多数である。しかも親睦と奉仕の関係は、「例会なくして親睦なし 親睦なくして奉仕なし」と考えている人がかなり多い。とすると、2700地区や2720地区の草の根のロータリアンとグローバルなロータリーではロータリー哲学の認識に食い違いがある。

この点に関しては古くから問題が指摘されている。アーチ・C・クランプ(第六代会長)。ロータリークラブの側にも、また、余りにも多くの個人ロータリアンの側にも、ロータリーとその目的、その目標、その理想について、明らかに認識不足がある。現在の管理当局はこの問題に真剣に取り組んだ結果、啓蒙運動として何らかの手段を講ずることが最も肝要だと考えた。この問題のすべては主としてクラブ会長の手にあるのだ。国際理事会がいかに努力しようとも、クラブ会長が有益な提案を実行しないならば、すべては徒労に帰すのだ。(ロータリー・モザイク ハロルド・トーマス著 松本兼二郎訳 59ページ)

そして、クラブの新会員が時を経てその重要なクラブ会長になり、その会長がまた時を経てガバナーになり、さらにARCのような中間管理職になる。もし、新会員にロータリー哲学の正しい初期教育が施されずに、「例会や飲み会に出席しておればそのうちに分かるよ」と放置され、例えば、例会出席、親睦、職業奉仕がロータリーの本質であるかのような刷り込みがなされたとなると、その後のPETSやGETS、あるいは国際協議会などの短期の研修会がいかに優れたものであっても、初期の刷り込みを打ち消すことはなかなか困難で、研修会での貴重な話が馬耳東風に聞き流されるのではないかと思うが如何であろうか。

「ロータリーの哲学などがきちんと理解されて、運動が続いていかない限り、しまいには単なる人の集まりに陥ってしまうのではないかと思います(ロータリーの友2019年10月号横組み32ページ)」また、これは初期教育のさらに前の段階の話になるが、「奉仕活動に興味のある人を誘うことが重要である」(ロータリーの友2019年8月号横組み16ページ)

第3地域ロータリーコーディネーター補佐 穴井元昭(博多RC)

日本の極端な出生数出生率の低下・超高齢化の中でロータリーとつながった錯覚のないインスピレーションを受けた幅広い人々のロータリーへの参加

世界でも類を見ない日本の「少子高齢化人口減少社会」の訪れを目の前にした今、ロータリーとのつながりを重視した、思い込みや錯覚のないインスピレーションを受けた幅広い人々のロータリーへの参加を目指さなければいけません。そこでロータリーは革新柔軟性のある広報によってロータリーのブランディングを高めるために「世界を変える行動人」と言う新しいグローバル広告キャンペーンを立ち上げました。そのキャッチコピーとしてはこれまでの「変えていこう」「力をつなごう」「ポリオをなくそう」「インスピレーションを生み出そう」に加え2019年2月発表の「導こう」「命を守ろう」「平和な世界を築こう」「学びを深めよう」「食育を支えよう」という言葉を使い、仕掛けにストーリー性をもたして地域や世界でより大きく貢献することによりロータリーの公共イメージを向上させようとしています。

最近緊張の中にも笑ってしまい笑ってしまうも生真面目になり生真面目の中にも現実を知りその現実の中にも反省しなければいけない話を聞いてしまいました。某都市部のクラブ員30～40人クラスのロータリークラブの例会においてその日クラブ内の説明会にRIと言う言葉が頻回に出て来たのですが説明者がアールワンと発言しそれが最後まで続きしかも誰もその発音の間違いに最後まで気がつかなかったと言う内容です。そのクラブでは年間を通じてガバナー公式訪問や地区大会等に於いて年間2～3回しかRI(アールアイ)と言う言葉を聞くことがないからだとのその方の言い訳説明でした。今ロータリーの現状を分析しますと自分との立場が似ている者同士は内容をよく理解しているものと判断し「会議は踊る」でロータリーの話は進行して行っていますが一方で会員の中にはロータリー活動に無関心な方も多く見られます。関心派を1人でも多く作りみんなできつなかりを持っていかなければいけません。最近身の回りであった「ロータリーは世界をつなぐ」の実践例を紹介いたします。2019/8/6～2019/8/14坂出東四国ロータリーサテライトクラブの議長の私と副議長の山野友禎武者小路千家教授及びアシスタント3人で、地区の国際奉仕ファンド(昔のWCS)より補助金をいただいてエチオピア大統領府にあるアフリカ唯一の日本庭園の茶室で茶道具の寄贈及び記念茶会を催すため、アディスアベバに行き参りました。日本庭園は前皇帝でハイレセランエ1世が1958年に日本の庭園技術に感銘を受けて作ったものです。茶室はあるものの十分な茶道具がないため今回釜や茶碗を含む茶道具を寄贈しました。当日はクラブの副議長である山野武者小路千家教授が亭主役となりエチオピアの政府要人(Teferi Fikre Gossaye副大統領、デラルツツル大統領補佐官、アフェワーク科学高等教育大臣、オリンピックのマラソンで優勝したメコネンなど)に作法に従って薄茶を差し上げました。この日は日本庭園に多くのテレビ局・新聞社の報道関係の方々が集まってこれしきりにインタビューがおこなわれました。

今回は衛星クラブであっても親クラブと協調して、あるいは単独でも国際貢献ができることを紹介しました。各地区で参考になれば幸いです。

第3地域ロータリー公共イメージコーディネーター補佐 前田直俊

(坂出東 RC、坂出東四国ロータリーサテライトクラブ)